エディトリアル
地域で気をつけるべき感染症

地域医療研究所長　山田隆司

特集

地域の診療所ではしばしば感染症の患者さんに遭遇する．患者さんは感染症に伴う発熱や局所の症状を訴えて受診することから，比較的安易に診断しブロードスペクトラムの抗菌剤の投与といった介入に至ることも少なくない．

しかしその一方でそういった初期対応で軽快せず，病状が進行した状態で高次の医療機関を訪れる患者がいることも事実である．診療所での初期の対応が不適切で重症化，蔓延化を来してしまうことは地域の医師にとって極めて深刻な問題である．

いかに病初期での診断が困難であっても，プライマリ・ケアの段階で多くの疾病の可能性を検討しておくことは欠かせない．どれだけ多くの鑑別診断病名を挙げられるかがプライマリ・ケアを担当する総合診療医の技量でもあるが，こと感染症に関しては症例経験の有無によるところが大きい．多くの失敗を経験して初めて初期診療の大切さを学ぶところがあるのも現実だ．

本特集ではそういった観点から実際に地域の診療所に従事する医師が気をつけるべきいくつかの感染症に的を絞り，実際の臨床に役立つ記述を各執筆者にお願いした．忽那論文では感染症診療の基本的な姿勢を総説として記述していただいた．田村論文ではともすると見逃してしまい，場合によって身近に二次感染者を出してしまう古くて新しい感染症である結核について，緒方論文では実際に疫学的なアプローチが重要となる食中毒について，いずれも診療所医師として知っておくべき事項をまとめていただいた．

また荻堂論文では皮膚科医の立場から診療所の医師が知っておくべき皮膚感染症診療のスタンダードを，古林論文では稀ではあるが，見逃してはならないHIV感染症についていずれも分かりやすく解説していただいた．

本特集が地域の最前線の診療所で活躍する医師にとって感染症診療の一助となれば幸いである．